



渡鹿遺跡群 (とろくいせきぐん)

渡鹿遺跡群は、白川下流域（渡鹿堰付近）の南岸に位置しています。

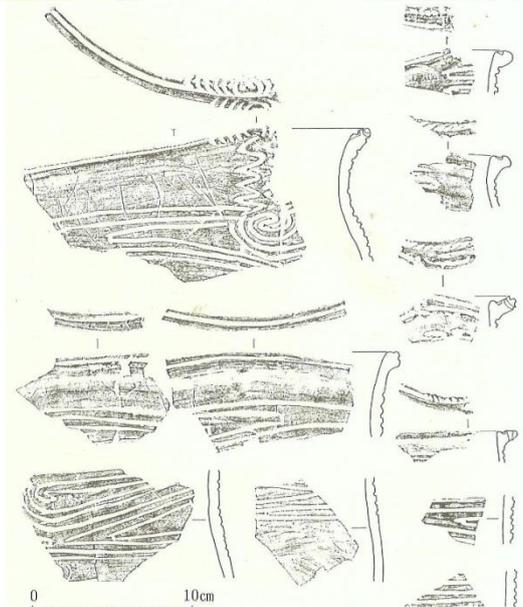
この遺跡群の存在は、昭和36年、渡鹿神社境内において貝塚が発見されたことから明らかになりました。縄文時代後期の土器が多く採集されたものです。

その他、近年の数回の発掘調査により弥生時代・古墳時代・奈良時代等の遺跡も見つかっています。

弥生時代では「擬朝鮮系無文土器（ぎちょうせんけいむもんどき）」といわれる朝鮮半島の影響を強く受けた土器の出土が注目されます。朝鮮半島と熊本平野とのつながりを示す資料です。

この遺跡の主体となるのは古墳時代後半（6世紀末～7世紀前半）の集落です。竪穴住居が多く見つかっており、土器等も多く出土しています。

奈良時代では、奈良地方でつられた陶器である「奈良三彩」片の出土が注目されます。稀少な出土例で、これは、対岸の熊本大学構内で古代の幹線道路（西海道）の中継基地である「駅家（うまや）」と呼ばれる施設が存在するなど、この地が交通の要所に位置すること、富裕な人がいたことを示す資料といえます。



縄文時代後期（約4000年前）の土器



奈良三彩の小壺 熊本での出土は珍しいです。